

可能動詞の助詞に関する一考察

市川 保子

要 旨

「りんごが食べたい」とともに「りんごを食べたい」が使われるようになってから久しい。では、可能表現ではどの程度「日本語を話せる」が「日本語が話せる」とってかわられているのであろうか。本稿ではどのような場合に可能動詞の目的語として「が」が選ばれ「を」が選ばれるかを考察する。「が」「を」選択の要因としては次のようなものが考えられる。

- ①話し手のムード
- ②一般的なことがらか特殊なことがらか
- ③状態性が強いのか
- ④意志性が強いのか
- ⑤言い切りかそうでないか
- ⑥従属節の中かそうでないか
- ⑦可能動詞の主語が「に」をとるか「が」をとるか

本稿では、「話せる」と「話すことができる」のような、可能動詞「える」「られる」と「～ことができる」文の意味的、用法的な違いについても考察する。

【キーワード】 可能動詞、「ことができる」、ムード、状態性、従属節

1. はじめに

筑波大学留学生教育センターでは1988年5月から初級日本語教科書作成作業を続けている。現在は数度の試行を反省材料にして、最終的な見直し作業に入っている。教科書作成作業は、作る側にいろいろな問題提起をしてくれるが、文法説明一つにしても、何をどこまで、どう提示するかという問題とともに、現在ゆれつつあると思われる表現の「ゆれ」の部分はどうとらえ、どこまで書くかという問題も起こってくる。「りんごを食べたい」か「りんごが食べたい」か、「りんごが置いてある」か「りんごを置いてある」かなどもその「ゆれ」の問題の一つと言えよう。本稿で取り上げる可能動詞も、従来の説明であれば、「日本語が話せる」でよしとするものであるが、「日本語を話せる」という言い方が時折聞かれるとなると、「を＋可能動詞」をどこまで記述するかという問題が出てくる。

しかし可能動詞が「が」をとるか「を」をとるかという問題は「ゆれ」の部分として取り上げる以前に、もっと基本的に文の構造とのかかわりから見なければならぬことがわかる。

可能動詞にかかわる問題には次のようなものが考えられる。

- 1) 「話せる」のような可能動詞と「話すことができる」のような「～ことができる」との意味的な違いとその使い分け。
- 2) 可能動詞の構文として次のような組合せが考えられるが、それぞれの可能性と意味的な違い、及びその使い分け。
 - (1) a 彼に日本語が話せる。
 - b 彼に日本語を話せる。
 - c 彼が日本語が話せる。
 - d 彼が日本語を話せる。
- 3) 現在の傾向として同じ条件のもとに「を+可能動詞」が「が+可能動詞」をどの程度侵食しつつあるか。

可能動詞の問題は可能動詞のヴォイスとしての位置づけ、受身、自発とのかかわりからもとらえなければならない。本稿は可能動詞にかかわる問題 1) 2) を整理することから始め、3) についても考えてみたいと思う。

2. 「話せる」と「話すことができる」

ここで「話せる」「食べられる」のように「える・られる」の形をとるものを可能動詞と呼び、「話すことができる」の形を「ことができる」と呼ぶことにする。

2. 1 インフォーマルかフォーマルか

インフォーマルかフォーマルかという言い方は会話的か文章的か、「話し文」にあらわれやすいか「地の文」にあらわれやすいかということに置きかえることができる。(2) がインフォーマル、(3) がフォーマル的ではないかということである。

- (2) 彼は日本語が話せる。
- (3) 彼は日本語を話すことができる。

インフォーマルかフォーマルかについては二つのとらえ方があり、奥田靖雄(1986)は(2)(3)にそのような違いを認める立場を、久野暉(1983)は認めない立場をとっている。¹⁾

奥田は数多くの用例にあたることによって、両者にそのような傾向を認め、次のように述べている。

語彙・構文的な手つづきをとる可能表現(本稿で言う「ことができる」文)は、どちらかといえば、<地の文>にあらわれてくるのにたいして、形態論的な手つづきをとる可能表現の文(本稿で言う可能動詞)のほうは<話し文>のなかにあらわれてくる、という傾向があっ

て、(中略)・・・。

科学的な説明文になれば、形態論的な手つづきの可能表現の文はほとんどつかわれることがない。

一方、久野は可能動詞と「ことができる」の使い分けの基準を「内的能力」と「外的能力」に置いているが、その中で次の a, b を対照させ、

(4) a 会費を全額まとめて支払えない会員には、分割払いの制度がある。

b 会費を全額まとめて支払うことができない会員には、分割払いの制度がある。

(5) a 山田は、やっと散歩に出られるようになったそうだ。

b 山田は、やっと散歩に出ることができるようになったそうだ。

(4) はフォーマルな場で使用される文であり、(4 a) のように可能動詞が使用条件さえ満たされていれば、フォーマルな文体にも用いられること、また(5) は会話調の文でありながら(5 b) のようにくだけた表現、会話調表現にも「ことができる」が用いられ得るとし、

「レル・ラレル」(本稿で言う可能動詞)と「デキル」(本稿で言う「ことができる」)の使い分けは、文がフォーマルであるかインフォーマルであるかというような文のスタイルの問題としては説明できないことがあきらかである

と述べている。

私自身が用例収集にあたってまもなく気がついたことは、両者のあらわれ方が遍在しているということである。新聞を例にとると、社説には可能動詞よりはるかに多く「ことができる」があらわれ、それが家庭欄などのエッセイや人生相談になると、可能動詞のほうが多くなる。投書欄も可能動詞が多い。可能動詞だけを収集するためには週刊誌の、それも硬派でなく大衆的なものであるほど可能動詞は多くあらわれてくる。もっと手っとり早く数を集めたいければ、女性週刊誌や、女の子向けの雑誌がよく、それらに可能動詞のあらわれる頻度は高いようだ。

(6)・・・左向いて両手を平行にした所でやっと落ち着いて眠れるの。そうするとね、好きな女の子の夢がみられるんだよね。
(Seventeen'90,7,18号)

可能動詞と「ことができる」の使い分けは、インフォーマルかフォーマルかの二者択一の問題でなく、両者はどちらにでも使えるが、どちらかと言えば可能動詞のほうが「ことができる」よりインフォーマルで、会話的に使われているということであろう。

可能動詞がくだけた文に多くあらわれるということは、話し手の気持ちをより直接的にあらわすムード的要素が強いと言える。一方、硬い文にあらわれやすい「ことができる」は叙述的でコト的な表現に使われやすいと言えよう。

2. 2 ムード的かコト的か

松本清張の推理小説『点と線』は単行本で226頁程度のものであるが、可能動詞が35例に対し、「ことができる」文は5例であった。『点と線』では、可能動詞は会話文にも地の文にもあらわれる。推理小説の手法で読者に臨場感をもたせるために、読み手をストーリーの中に引き込む、話し手と読み手が一体となるような文体が用いられている。

(7) 三原は手帳を出した。一度聞いただけでは、よくのみこめなかった。

(8) そうだ。確かに舞台は、日本の両端にひろがったといえそうだった。

一方、「ことができる」の用例には次のものがある。

(9) ことに、佐山の場合は、うっかり遺書を書くこともできなかったであろう。

(10) この二つが重なりあって、13番ホームに立って15番ホームを見通して眺めることはできなかった。

(9) は佐山という人物の事情を察する、(10) はそのときの列車の重なり状態を描く、いずれもある事態を客観的にとらえた表現である。小説で(10)につづいて出てくる(11)と比較するとその差は明らかのように思われる。

(11) (なるほど)と彼はうなった。1時間以上もこうして突っ立ってのぞいているが、ついぞ15番線がのぞけなかった。

新聞や雑誌の広告には可能動詞が用いられることが多い。短く、手早く読者に訴えるという目的のために、「ことができる」より音節の短い可能動詞が用いられているのであろうが、可能動詞によって直接的に読者の心情に訴えようとしているとも言える。

(12) 薄着のおしゃれが存分に楽しめる (読売新聞'90,11,11)

(13) 準備はわずか3分。カンタンに、あこがれのソバージュがくれます。

(Seventeen'90,7,18)

(14) ~ (16) は広告ではないが、新聞の見出しに出てきた可能動詞である。

- | | |
|------------------|-----------------|
| (14) カードが突然使えない。 | (読売新聞'90,11,13) |
| (15) 自分の時間を持てる人 | (朝日新聞'90,11,13) |
| (16) サヨナラ、が言えない旅 | (読売新聞'90,11,14) |

これらを「ことができる」で置きかえようとするとは非常にまどろっこしいものができる。

- (14)' カードを突然使うことができなくなった。
 (15)' 自分の時間を持つことができる人
 (16)' サヨナラ、を言うことができない旅

このように見えてくると、可能動詞は話し手の心情を直接訴える、言いかえれば、読み手に話し手の心情を直接に感じさせる働きを持っていると言えよう。

2. 3 内的能力か外的能力か

久野は可能動詞と「ことができる」を対比させて、「可能動詞「レル・ラレル」は、主語の内的能力をあらわし、「デキル」は、外的条件に由来する能力をあらわす」と言っている。久野の「内的能力」「外的能力」は、それぞれ、奥田の「ある動作・状態を実現する能力がものにそなわっている」という意味を伝えている<能力可能>、条件が存在していれば、あるいは条件が存在しているために、ある動作・状態の実現が可能である」という意味を伝えている<条件可能>と同じものと考えられる。奥田は可能（可能動詞と「ことができる」のそれぞれ）の中に内的能力と外的能力の二つのヴァリエントがあると言っているので、久野の立場とは異なる。

久野は(17b)の不自然さは内的能力についての言及であるのに、外的能力をあらわす「ことができる」を使ったためであるとし、(18)は外的条件をあらわしているのであるから、「ことができる」を使っても不自然ではなくなるとしている。

- (17) a アメリカに長くいて、日本語を話す機会が少ないので、日本語が話せなくなった。
 ? b アメリカに長くいて、日本語を話す機会が少ないので、日本語を話すことができなくなった。
- (18) a パーティーにアメリカ人を呼ぶと日本語が話せなくなるから、日本人だけにしましょう。
 b パーティーにアメリカ人を呼ぶと日本語を話すことができなくなるから、日本人だけにしましょう。

しかし、私には(17b)の主語を第3者にするとは不自然さは解消されるように思われる。

(17) b 彼はアメリカに長くいて、日本語を話す機会が少ないので、日本語を話すことができなくなった。

一方、(17 a) の主語を「彼」にすると、文のニュアンスが少し変わり、話し手が「彼」の変化を自分の心情を通してとらえている感じがする。

(17) d 彼はアメリカに長くいて、日本語を話す機会が少ないので、日本語が話せなくなった。

(17 a') (17 b') に対する判断は非常に微妙で、個人差はあるだろうが、その判断の微妙さは、久野が可能動詞を「内的能力」、「デキル」を「外的能力」と区分けしようとする判断の微妙さと同程度と考えられる。むしろここでは、2. 2 で見たように、可能動詞がムード的、「ことができる」がコト的にとらえたほうが一貫性があるように思う。

2. 4 語彙的範ちゅう

可能動詞は、非状態性で意志性を持つ動詞に、接尾辞「える・られる」がついて、可能をあらわす状態性無意志動詞になったものである。では、非状態性の意志をあらわす動詞はすべて可能動詞になることができるのであろうか。

奥田は「行く」「歩く」「泳ぐ」「読む」「書く」「飲む」「眠る」のような日常生活の中でしきりに使われる動詞は「行ける」「歩ける」「泳げる」のような可能動詞の形を持っているが、「満たす」「のぞく」「仰ぐ」「騒ぐ」「荒立てる」「見上げる」「引き受ける」のような動詞は、可能動詞を意識的に作ることはできるが、実際の文の中ではほとんど使用されることはないだろうと言っている。2. 1 で見たように、可能動詞が大衆雑誌や少女雑誌などの、それも話しことばに多くあらわれるのは、やはりそこでは日常的な平易な動詞が使われているからであろう。

次は現代小説からの例であるが、それぞれの文に出てくる「ことができる」は可能動詞にかえにくいと思われる。

(19) ぼくはいつでもそれを自分の手足にかぐことができる。 (裸の王様219)

? かけろ

(20) 母親に禁じられて彼は粗野で不潔な仲間とまじわることができず、いつも

? まじわれず

ひとりぼっちでいる。

(裸242)

(21) ぼくは太田氏に面とむかって太郎の歪形を訴えることができたが、・・

? 訴えられた

特殊な状況ではこれらの動詞が可能動詞をとるときもあるが、ふつうはあまり使われない。
 (21) のように受身の意味のほうに働くものもある。

可能動詞がインフォーマルであることも照らして、可能動詞があらわれやすいのは、やはり奥田の言うように、「行く→行ける」「買う→買える」「話す→話せる」などの日常生活の中でよく使われる動詞であると言えよう。

2. 5 まとめ

以上2. 1～2. 4まで可能動詞と「ことができる」について見てきたが、両者の違いは次のようにまとめられよう。

可能動詞	ことができる
インフォーマルの	フォーマルの
会話的	地の文（説明的）
ムード的	コト的
話し手の心情をあらわす	第3者のことを客観的に述べる
日常の動詞	ほとんどの動詞に可

3. 「日本語が話せる」か「日本語を話せる」か

2で可能動詞と「ことができる」の意味的及び用法的な違いを見た。では「ことができる」より、よりムード的で、会話的な可能動詞は目的語としていつ「を」をとり、いつ「が」をとるのであるうか。

1で見たように可能動詞には a～d までの形が考えられる。

- (1) a 彼に日本語が話せる。
 b 彼に日本語を話せる。
 c 彼が日本語が話せる。
 d 彼が日本語を話せる。

ここで少し変形文法での考え方をのぞいてみよう。²⁾ 変形文法では可能文に補文((1)では「彼が日本語を話す」)を考える。可能文では「目的語繰り上げ規則」が任意に適用されるので、(22) は a b とも許容される。

- (22) a ジョンはロシア語が読める。
b ジョンはロシア語を読める。

また、可能文では補文の目的語が主文（可能文）の目的語として繰り上げられた場合（「ジョンにロシア語が読める」のような場合）にのみ主語に「に」があらわれる。したがって上記の（1b）、また（23）のような文は非文となる。

- (23) ?ジョンにはロシア語を読める。

主語が「に」をとるか否かは任意に適用されるので、(24) (25) も許容される。

- (24) ジョンがロシア語が読める。
(25) ジョンはロシア語が読める。

しかし(24) (25) では主語につけられた「が」と目的格につけられた「が」が連続しているため、主語の「が」を「に」に任意変形することが可能となる。³⁾

- (26) ジョンにロシア語が読める。

主語が「に」「が」の、目的語が「が」「を」のいずれをとるかは表層に近いところで適用される。したがって上記の(1a) (1c) (1d) は「同じ知的意味を持つ」が、「表層の違いのために、これらの文の強調点の違いや文体上の違いが出るのは当然である。」²⁾とされる。

変形文法の考え方を通してわかることは、本稿で取り上げようとしている「日本語が話せる」と「日本語を話せる」の違いというようなことは、話し手の気持ちや、強調の仕方、説明的かそうでないか、書きことばか話しことばかなどのきわめて表層に近いところに関係することだということである。言いすぎてしまえば、同じ話し手が同じような状況で、ある時には「日本語を話せる」と言い、ある時には「日本語が話せる」と言うこともあるかもしれないような、きわめて微妙な、極端に言えば、「が」「を」どちらでもたいしてかわらないような問題とも言えよう。

本稿はそれを了解した上で、話し手が「が」「を」のどちらかを選んでいいる以上、そこには、使用の方の上での、何らかの一般性があるのではないかと考えるのである。

3. 1 可能動詞の主語

可能動詞の主語が、表層において、どのような場合に「に」をとるかについては、普通には、強

調的な場合、また対比的な場合に「に」をとると言われている。⁴⁾

本稿では主語に「に」のあらわれる条件についてふれる余裕がないので用例をいくつか示すとどめる。

(27) わたしにそんなことが言えるかしら。

(28) クラゲに物が言えたなら、こう叫ぶに違いない。 (読売新聞'90,11,12)

(29) あいつにやれることがどうしておまえにできないのか。

(30) ニコルさんが言いたいのは、子どもにナイフが使えないわけではなく、大人が持たせないから、使えない人間になったり、使い方を間違えてしまうだけだ、ということである。
(Topnotch Vol. 66)

(27)(28)は強調の例であり、(29)(30)は対比(「あいつ」対「おまえ」、「子ども」対「大人」)の例と言えよう。

3. 2 可能動詞の目的語

2. 4で、日常生活の中でしきりに使われる動詞は可能動詞を持つが、そうでない動詞は必ずしも可能動詞を持つとは言えないことがわかった。では、可能動詞が目的語として「を」をとるか「が」をとるかも語彙によって決まっているのであろうか。ある動詞群は「を」をとりやすく、ある動詞群は「が」をとりやすいということがあるのだろうか。

まず日常生活によく使われる<食べる><買う><書く>についてみてみよう。

<食べる>

(31) 楽をして食べる弁当よりも、汗をかいた後の弁当が、おいしく食べられるのは当り前のことだ。 (読売新聞'90,11,15)

(32) 日本ならば安全だし、居ながらにして世界のおいしいものが食べられる。 (朝日新聞'90,11,13)

(33) 恵まれた飽食の時代には、好きなものがたくさん食べられるから、食物の範囲はむしろ狭くなる危険がある。 (東京新聞'90,11,14)

(34) 「好きなものを食べられるし、自由にテレビ番組を選べる。好きな歌も大声で歌える」とミヨは、住み分けが気に入っている。 (読売新聞'90,11,13)

(35) 新工場の特色は、できたての本格派ハム、ソーセージをその場で食べられることです。 (読売新聞'90,11,7)

(31)～(33)は「が」、(34)(35)は「を」の例である。日常生活では基本的な動詞と思われる「食べる」は、これらの例を見る限り、「が」「を」両方とっている。

<買う>

- (36) 学校でジュースやパンが買えることに、ちょー感動。 (Seventeen'90,7,18号)
- (37) となりのベンチでは、ようやく懐中電灯が買えたらしい家族連れが、額を寄せてなにやら相談している。 (文春'90,10,18号)
- (38) 三菱の社員が東京に家を買えないと言うのは、やっぱりおかしいですよ。 (文春'90,10,25号)
- (39) 米を現金で買えるようになったのは、そう遠い昔ではない。 (日経新聞'90,11,4)

<買う>も<食べる>と同様「が」「を」両方をとるようだ。

<書く>

- (40) いまは、ひとつのスタイルさえ持っていれば、絵本が書ける時代なんです。 (文春'90,11,1号)
- (41) 趣味を切り捨てないと、僕は小説が書けない。 (文春'90,11,1号)
- (42) 版画家の方が小説を書けるのなら私だってと思ったんです。 (文春'90,10,25号)

<書く>も両方使えそうである。もう少し、他の日常に使われる動詞の例を見てみよう。

<飲む>

- (43) 一日に七百cc以上の水が飲める患者には徐々に点滴をやめるように指示された。 (読売新聞'90,11,11)
- (44) ロング缶のウーロン茶を飲めれば最高の幸せだとつくづく感じているんだ。 (文春'90,11,22号)

<読む>

- (45) あの名作ジャングル大帝が、黒人が登場するという理由でもう読めなくなってしまう可能性だってあるんです。 (文春'90,10,25号)
- (46) 先生が推奨する『論語』を自分でも読めるようになりたい。 (読売新聞'90,11,11)

このように見てくると、日常生活で使われる動詞にも「が」をとる場合、「を」をとる場合があり、その選択の条件は別に求められなければならないことがわかる。

3. 2. 1 選択の条件 (状態性か非状態性か (意志の度合))

可能動詞の目的語が「が」をとるか「を」をとるかという違いは、可能動詞が非状態性意志動詞から、状態性無意志動詞に移行したものであるため、話し手の意識 (視点、ある事態のとらえ方) が非状態性寄りのものから状態性寄りのもの、全く状態性のものまでの幅を持つためと考えられる。

可能動詞の中には (47) (48) のようなそのものの性質 (属性) をあらかず用法があり、この場合は「を」をとることはない。

(47) この水は飲めない。

(48) あの食堂のめしは食える。

また可能動詞に含まれると考えられる「できる」「わかる」も通常「が」をとる。

(49) 彼はスキーができる。

(50) 彼女はドイツ語がわかる。

また次のような可能表現は自発表現と構文的には同じになる。⁵⁾

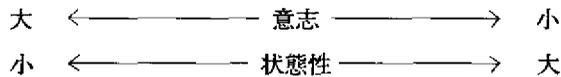
(51) この瓦は売れるか。(売ることができるか? 商品か?) (可能)

(この瓦はよく売れるか。(売れ行きはよいか?) (自発))

(52) このナイフはよく切れる。 (可能)

(糸が切れた。 (自発))

「売れる」「切れる」のような動詞は「を」をとることはほとんどない。これらの属性化した可能動詞が「が」しかとらないということはその可能表現が属性的であればあるほど、つまり状態性、



	可能動詞		属性可能動詞		
	話す	話せる	できる わかる	飲める 食える	切れる 売れる
とる助詞	を	が/を	が	が	が

無意志的であればあるほど「が」になりやすいと考えることができる。これらのことを図式化すると次のようになる。⁶⁾

属性的であるということは、その表現が「だれが何をした」という意志的な動作よりも「(それが) どうである」という性質・状態をあらわす。われわれがある事態を可能表現でとらえようとするとき、状態性の小さい、意志的なもの「だれが何をしたか」に視点をおくか、状態性の大きい、非意志的なもの「(それが) どうであるか」に視点をおくかで「を」か「が」かのいずれかを選んでいると考えられそうである。⁷⁾

3. 2. 2 選択の条件 (ムード的要因)

<食べる>において、「が」をとる (31) ~ (33) と、「を」をとる (34) (35) の違いは、前者が特定の主語を想定していない、一般的な事柄の叙述であるのに対し、後者は主語が特定されていることである。(34) では話し手が自分のことを言っているし、(35) では主語は「お客さん」であり、事態もその店という特定のことを言っている。<買う> (36) においても、主語が特定されていない。

<読む> (45) (46) は、両者とも可能動詞に「なる」のついた形であるのに、(45) が「読めなくなってしまう」と無意志的な事態の変化に「が」を、(46) が「読めるようになりたい」と、意志的なものに「を」を選んでいいる。

また (45) では「あのジャングル大帝が」と「が」が強調的に取り立てる役割をしている。「が」は排他、特立と言われるように前接する名詞を他から取り立てる機能を持つ。

<書く>について見ると、(41) は言いきりの形で話し手のムードの強い表現である。<食べる> (32) とともに、「が」が「を」になると落ち着きが悪くなる。

(32)' ……おいしいものを食べられる。

(41)' ……僕は小説を書けない。

言いきりの形で「を」が使われていると、私には、文が終わらないで続いていくような気がする。

(34) では言いきりの形で「テレビ番組を選べる」が出ている。しかしこれは形だけが言いきりになっているのであって、「テレビ番組を選べるし、好きな歌も・・・」と続いていくと考えられる。

3. 2. 3 選択の条件 (構文的要因)

では、次に構文的要因について見てみよう。

<買う> (38) では可能文の主語が「が」をとっているのので、目的語も「が」をとると、「が」

+「が」となるために目的語の方が「を」になっていると考えられる。

名詞と可能動詞の間に他の語が入ることによって「が」が「を」になりやすいかどうかについては、〈食べる〉(35)、〈買う〉(39)、〈読む〉(46)からもある程度のことはいえそうである。一方、〈食べる〉(31)で「おいしく」「たくさん」が介在していても「が」が使われているところを見ると、動詞の前に副詞というより補語の入ったとき、「を」が使われやすいといえそうである。

〈書く〉の(42)、〈飲む〉の(44)は、条件節の中の可能動詞が、〈食べる〉(35)、〈買う〉(38)(39)は、名詞節の中の可能動詞が、「を」をとっている例である。収集例では条件節の時はずべて「を」をとっていた。従属節の中に可能動詞がはめ込まれると「を」をとりやすくなるのは、複雑な文構造の中で、目的格として格を明確化し、混乱がおきないようにという気持ちが働くためであろうと考えられる。

複雑な文構造という点から言うと連体修飾節の中の目的語も「を」になりやすいはずであるが、〈買う〉(37)、〈書く〉(40)、〈飲む〉(43)は「が」をとっている。理由はよくわからないが、「懐中電灯を買えたらしい家族」「絵本を書ける時代」「水を飲める患者」とわざわざ「を」にしなくても格関係が明確だからかもしれない。

3. 2. 4 選択の条件(まとめ)

以上、「が」「を」選択の条件をムード的要因、構文的要因に分けて考えてきた。これらをまとめると次のようになる。⁸⁾

- ① 主語が不特定で、述べられる事態も一般的なときは「が」があらわれやすい。
- ② 言いきりの形で、主語が話し手の場合は「が」が使われやすい。
- ③ 「が」で強調的に語を取り立てようとすることがある。
- ④ 話し手が意志的に伝えようとするほど「を」をとる。
- ⑤ 目的語と可能動詞との間に補語が介在すると「を」になりやすい。
- ⑥ 従属節の中で、可能動詞の主語が「が」をとる場合、目的語は「を」をとりやすい。
- ⑦ 条件節において可能動詞の目的語は「を」をとりやすい。
- ⑧ 条件節に限らず名詞節その他の従属節でも、こみいった文の中では「を」が出やすい。
- ⑨ 可能動詞の主語が「に」をとる場合、目的語は「が」をとる。

4. 実際の会話と「を+可能動詞」

いままではそれが会話文の中の用例であっても、一応書かれたものを見てきたことになる。では、実際の話しことばでは可能動詞の目的語として、「が」「を」の使い分けはどうか。次のようなものがラジオやテレビの対談番組から得た「を+可能動詞」の例である。

(53) 歌舞伎にどんな新しいものを求められるのか、というようなことを考えなければ・・・

(テレビ NHK 対談)

(54) いいプログラムを作ればいいと思いますね。

(ラジオ NHK 対談)

(55) やっぱりレベルを落とせないということがありますからね。

(テレビ民放対談)

(56) これをいつか返せる日が来る・・・返せるというか、今度、山城新吾さんへ小林幸子よりと、
ということは・・・

(徹子の部屋)

(57) どっかで慢心してないか、足元をきっちり見れなくなってどっかで有頂天になってないかってことをいっつも思い出酒のイントロで教えてもらってるんですね、私・・・

(徹子)

(53)～(59)の「を+可能動詞」の使われ方を見ると、3でまとめた構文的要因というものが話しことばに大きく支配しているようである。

次の例では、話し手は助詞を選びながら話している。これは話し手に格関係をはっきりさせようという意識が働いているのではないかということ想像させる。

(58) ピン子ちゃんもそうだし、私もそうなんですけど、自分はこの歌を、は、しか歌えません
とか言っていたら、仕事ないんですよ。

(徹子)

目的格を確立しておいて可能動詞をくっつけていくという操作が話しことばの最中になされいるとすれば、よほど話し手がムードを強めて、ある事態を聞き手に訴えようとするとき以外は、「を」が選ばれやすいということになる。

ただし「日本語を話せる」と「日本語を話したい」の違いは、「～たい」が話し手の意志をあらわす表現であるため意志の強さの程度にそって「を」がより頻繁にあらわれると考えられるが、可能動詞は「～たい」より、より状態性、非意志性の表現であるため、「～たい」のように「を」はあらわれにくいだろうと考えられる。

5. おわりに

以上、可能動詞とそれをめぐる助詞について考えてきた。可能動詞が「を」をとるか「が」をとるかはムード的要因、状態性、意志の大小、そして構文的要因によって選ばれていることがわかった。

次の用例はつい最近の新聞の家庭欄からひろったものである。3. 2. 1で述べた「できる」や「好きだ」という「が」をとるはずの述語が「を」をとっている。本稿で検討した構文的な条件にのっとったものではあるが、「を/が」が今後どうかわっていくのか、実際の会話を含めて見守っていききたいものである。

- (59) 東京・中央区の銀座東急ホテルでは今年、宿泊客が外出せず初もうでをできるよう、今月三十日にホテルの一室に神社を仮設する。
- (60) 私の悩みは女性を好きになれないことです。 (以上読売新聞'90,12,29)

(注)

- 1) Seiichi Makino and Michio Tsutsui (1989) の「koto ga dekiru」の項には次のような説明がある。ここで言う the shorter potential form は本稿での可能動詞、the longer potential form が「ことができる」にあたる。

Basically, the difference between the short and the longer potential form is one of style ; namely, the shorter version is more colloquial and less formal than the longer one.

- 2) 井上和子(1976)
- 3) 井上によれば、自動詞は繰り上げられる目的語がないわけであるから、「に」が付加されることはないとされる。しかし、強調的、対比的であるときは、自動詞でも「に」があらわれると考えられる。

?ジョンに早く走れた。

ジョンにそんなに早く走れるわけではない。

ジョンにそんなに早く走れても、私には走れない。

- 4) Alfonso (1980) p. 918
- 5) 寺村秀夫(1982)は、可能表現において主語(能力をもつ主体、または可能な状態にある主体)が「不特定の人、一般的な基準をあらわす場合に文から姿を消し(「省略」ではない)、受動的可能表現の形をとったときは、自発表現と構文的には同じになる」と述べている。寺村は、可能態と自発態の仕分けは「～ている」という形をとれるか否かによってなされ、「～ている」という形がとれなければ可能態、とれば自発態となり、これは可能態は状態性の表現、自発態はできごとの表現だから当然であると説明している。「売れる」「切れる」の用例は寺村から借りた。
- 6) 影山太郎(1990)の表を参考にした。
- 7) Seiichi Makino and Michio Tsutsui (1989) の「rareru」の項では「を+可能動詞」と「が+可能動詞」の違いを次のように説明している。

In general, the choice between GA and 0 seems to depend on the degree of volition expressed in the action the experiencer takes. That is, if his volition is high, 0 is preferable.

- 8) 今回集めた用例の中で一番頻度の高かったのは<使う>の13例であった。そのうち「が」は6例、「を」は7例であった。「が」のうち3例を占めていた新聞記事と、「を」のうち4例を占めていた雑誌記事の一部を紹介する。「が」と「を」の使い分けが対比的になされていて興味深い。

Dandyism

「でも、不思議だね。日本人はこんな素晴らしいナイフを作れるのに、ナイフを使えない人が多すぎる。このナイフの一番の特徴は、先端が丸いため、切れることはできても、刺せないこと。それに子どもの手にスッポリと収まる大きさで、もちろんロックも安全。大人が子どもに、責任をもってナイフを持たせられるような、危険のないものにしたんだ」

自分でナイフをデザインしようと思った直接のきっかけは、友だちの医者から、「今の若い医者のタマゴは、メスを使えない」と、聞いたことだという。

「・・・中略・・・そんな子供が将来医者になって、メスが使えないなんてことは絶対にない。もちろん、これは極端な例だけだね」

ニコルさんが言いたいのは、子どもにナイフが使えないわけではなく、大人が持たせないから、使えない人間になったり、使い方を間違えてしまうだけだということである。

人間の基本的な道具であるはずのナイフを、使えない男が増えた。

・・・後略・・・

(Topnotch 66号 '91,1,1)

(参考文献)

- 寺村秀夫 1982 『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版
- 奥田靖雄 1986 『現実・可能・必然(上)』『ことばの科学 その1』むぎ書房
- 益岡隆志 1987 『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版
- 影山太郎 1990 『基本と派生—他動詞、自動詞、非対格動詞—』日本語シンポジウム『言語理論と日本語教育の相互活性化』津田塾会
- 久野 暉 1983 『新日本文法研究』大修館書店
- 井上和子 1976 『変形文法と日本語(上)』大修館書店
- Seiichi Makino and Michio Tsutui 1989 『A DICTIONARY OF BASIC JAPANESE GRAMMAR』
The Japan Times
- Anthony Alfonso 1980 『Japanese Language Patterns』Vol. II Sophia University (Forth printing)

(引用出典)

「裸の王様」 開高 健 中央公論社『日本の文学』76

「点と線」 松本清張 新潮文庫

雑誌（文春、Topnotch、Seventeen）

新聞（読売新聞、朝日新聞）

テレビ（対談、徹子の部屋 '90,11,14 ）